

## 3. 家が流れた

大鹿村大河原中学校二年 K・J

農繁休みが二十五日まで、二十六日から学校が始まった。どのつぎの日の二十七日の日は五時間授業をして、あまり雨がひどいからと、部活ごとさまさま帰った。

桶谷へきて見ると、もう三十センチばかりで道へ水が乗りあげるとこだった。河原は横中が約百メートルくらいで、河原から道までの高さが四メートルか五メートルくらいあった。そんな広い河原いっぱいには、ものすごい水だった。やっと家へついた。私の家の前には沢がある。いつもはほんのちよつどの水なのに、二十七日の日はものすごい水の量だった。

私の家と沢とは六メートルくらいしかはなれていなかった。私は自分の家にいるのがおそろしかった。河原の水を見るとさっきよりも多くなつていて、道へ水が乗りあげていた。家の前の沢も水が多くなるいっぽうだ。

私と弟はカバンへ勉強道具を入れた。カバンはいつも自分のそばへおいていた。五時半頃夕ごはんをたべました。おとなりの Y のおじさんが、「河原の水が道を乗りこえて、田んぼへ水がついて、田んぼは全滅だ。」といつてきた。夕ごはんをたべ終つてから沢を見たら、水の量が多くなつてきた。お父さんが、「Y へ子供たちは避難したほうがよい。」といつたので、私と弟は安全なおとなりの Y へ避難することになった。

カバンをもつて弟をつれて、お母さんにおくつてもらって、Yへ行つた。お母さんが、

「よろしくお願ひします。」とかいつたのんでいた。

その時沢でものすごい音がした。びっくりしていたら、おとなりのHのおじさんが、

「沢がおしおしおしてきた。おれは、みんなを呼んでくるぞ。」「といて走って行った。お母さんは、私と弟に、

「あぶないから家の外へ出まはいけないよ。もしもこの家があぶなくなつたら呼びにくるから、家の中にいるんだよ。」「といて走って行った。

少しすると近所の人たちが石油玉へ火をつけ、家の方へもつていった。私はおそろしさをふるえていたら、いろいろな家具がはこばれまきた。よくみると、私の家の家具は少ししかない。その少しの家具にいつぱいどろがついていた。おとなの人にきいてみると、もう家の中やまわりはものすごい水で、あぶなく、家の中へは行けないといつた。お父さんやお母さんやHの人たちは、びしびしにぬれていた。近所の人たちは帰って行った。

私の家の一家と、Yの一家は、みんな火ばたをとりまいてすわつた。まるくなつてすわつても、だれ一人として口をひらくものはなかった。どうして、人間にも雨は降り、沢はものすごい音をたてておしめてくる。十時ごろ、子供と女の子は、部屋へふとんをしいてよこになつた。男の人たちは、ローソクを一本たてて火ばたへすわつていて、沢でものすごい音がすれば、石油玉へ火をつけ

て涙のようすを見に行つてきました。私たちも音がすればすぐとびおきて、みんな火ばたをとりかこんだ。お母さんたちは、私たち子供にも、「死ぬるとき全部いっしょに死ぬんだから安心してねえいるよ。おまえたちはかりは殺さんから。」といった。

だけど、どうしてもおそろしくねむることができなかった。

二十八日午前一時五十分。今までよりも五倍も六倍もものすごい音がしたかと思ふと、「メリーメリー」と木のおれる音にすぐ続いて、物が倒れる音がした。すぐ、Ｙのおじさんが石油玉を持って涙を見に行つた。おじさんは、かえつてきまから、

「どうも、Ｊさんの家は行つちやつたらしい。」といった。

私は、まさかと思つた。どのときのおどろきは、経験した人しかわからない。私の流された家は、私たち一家が約十年愛用してきた家なのだ。

また火ばたをとりかこんで全員すわつた。それからは、あと何時間で夜が明けるとかいつて、夜の明けるとままつた。こんな日にかぎつて、夜が明けるとかほんとうにおどかつた。

やつと明るくなつてきた。雨はきのうよりよわくなつたが、まだしとしとと降つていた。明るくなつてきたが、被害は多くなつていった。道はとざさかましまつて、ほかの部落との連絡がつかなくなつた。

(三十六年)